

平成30年度 市内遺跡発掘調査報告書

2019

甲賀市教育委員会

序

甲賀市は滋賀県の南東部に位置し、市内には国指定史跡である「紫香楽宮跡」・「垂水畜王頼宮跡」・「甲賀郡中惣遺跡群」・「水口岡山城跡」のほか、現在、約 530 箇所¹の埋蔵文化財包蔵地が確認されています。

地域に残る文化財は先人から受け継いだ貴重な財産であり、この「地域の宝」を守り伝えていくことが私たちの責務であると考えます。

今日まで残されてきた文化財を保護し、調査、研究をすることによって地域の歴史が明らかとなり、市民活動と連携することで郷土への愛着や誇りの機運を醸成し、まちづくりへと発展していきます。

教育委員会では、市内の開発行為に伴い試掘・確認調査を実施しています。平成 29 年度の調査では、水口岡山城遺跡において城と城下町を区画する堀の一部が発見されるなど、重要な成果をあげています。本報告書に掲載する調査成果が、本市の歴史を解明する一助となり、広く活用されることを切に願っています。

最後になりましたが、本報告書を刊行するにあたり、御協力いただきました関係者の皆さまに厚く御礼申し上げます。

平成 31 年（2019 年）3 月

甲賀市教育委員会
教育長 山下 由行

例 言

1. 本書は甲賀市教育委員会が平成 29 年度に実施した試掘・確認調査の概要をまとめたものである。なお、本書に掲載した調査は、平成 29 年度に現地調査を実施し、平成 30 年度に整理調査を実施した。
2. 本書で報告している試掘調査にかかる経費は、国宝重要文化財等保存整備費補助金（国庫補助金）および滋賀県文化財保存事業費補助金（県費補助金）を得た。
3. 平成 29 年度および平成 30 年度の甲賀市教育委員会における調査体制は以下の通りである。
調査主体 甲賀市教育委員会 教育長 山下 由行
調査事務局 甲賀市教育委員会事務局 歴史文化財課
課長 長峰 透
課長補佐 兼 埋蔵文化財係長 鈴木 良章
主査 小谷 徳彦
主査 渡部 圭一郎
技師 伊藤 航貴
4. 本文の執筆・編集は伊藤が行った。また、本書に掲載した図面の作成は伊藤が担当し、平本瞳（調査作業員）が作業にあたった。
5. 本書で示す北は座標北である。
6. 本書で報告した発掘調査で出土した遺物や図面・写真類については、甲賀市教育委員会が保管している。

目 次

試掘調査

全体概要	1
17-01、02 次 水口城遺跡の調査.....	2
17-04 次 西林口遺跡の調査.....	6
17-09 次 植遺跡の調査.....	9
17-12 次 水口岡山城遺跡の調査.....	12
17-13 次 植城遺跡の調査.....	19
17-15 次 文殊院遺跡の調査.....	22
17-21 次 岩室城遺跡の調査.....	24
17-22 次 補陀楽寺遺跡の調査.....	27

全体概要

甲賀市において平成29年度に実施した埋蔵文化財の発掘調査は、開発事業などにかかる試掘・確認調査及び分布調査が25件、民間開発事業にかかる本発掘調査が1件であった。

開発事業などに伴う試掘・確認調査及び分布調査のうち、周知の埋蔵文化財包蔵地の範囲内で実施した調査が11件、同範囲外で実施した調査が14件であった。範囲外の調査は「甲賀市みんなのまちを守り育てる条例」の規定に基づき、開発事業の実施に先立ち、遺跡の有無を確認するために試掘調査及び分布調査を実施したものである。なお、開発に伴う試掘・確認調査及び分布調査の件数は、平成28年度の26件と同数であった。

民間開発事業にかかる本発掘調査は、貴生川遺跡内における宅地造成工事に先立つ発掘調査であり、この調査成果については平成29年度に『貴生川遺跡第4次発掘調査報告書』として刊行している。

表1に平成28年度に実施した試掘・確認調査を一覧表にして示した。遺物の出土を確認した調査が7件、遺構の存在を確認した調査は5件であった。17-05次の東山遺跡で実施した試掘調査では、奈良時代のものと思われる大型の柱穴が確認された。そのため、平成29年10月より東山遺跡第2次発掘調査として、確認調査を実施した。この調査に引き続いて平成30年度には東山遺跡第3次発掘調査を実施し、その調査成果は第2次発掘調査の成果と併せて報告書を刊行予定である。

表1：平成29年度に実施した試掘・確認調査および分布調査一覧

NO	内容	調査 回数	調査 開始日	調査 終了日	調査地		目的	遺跡 有無	遺跡 名	調査面積(㎡)	結果			
					町名	大字					遺物	遺構	遺構	詳細
1	試掘	17-01次	H29.4.17	H29.4.17	北口町	本丸	個人事務所 敷	あり	北口城遺跡	4	×	×	×	×
2	試掘	17-02次	H29.06.12	H29.06.12	北口町	城内	宅地造成	あり	北口城遺跡	33	△	陶器、磁器	×	×
3	試掘	17-03次	H29.06.08	H29.06.08	甲賀町	大塚中	開発中	無		45	×	×	×	×
4	試掘	17-04次	H29.06.20	H29.06.20	北口町	西林口	宅地造成	あり	西林口遺跡	18	△	陶器	△	ビット1基
5	試掘	17-05次	H29.07.10	H29.08.01	信楽町	長瀬	太陽光発電	あり	東山遺跡	1,350	×	×	○	ビット・鎌倉遺構
6	試掘	17-06次	H29.08.28	H29.08.28	北口町	赤生野	農舎住宅	無		30	×	×	×	×
7	分布調査	17-01次	H29.06.27	H29.06.27	北口町	山	太陽光発電	無		5,708	×	×	×	×
8	試掘	17-08次	H29.07.18	H29.07.19	北口町	北原	店舗建設	無		60	△	土器 陶器	△	ビット
9	試掘	17-09次	H29.09.28	H29.09.28	北口町	橋	個人事務所住宅	あり	橋遺跡	10	×	×	×	×
10	試掘	17-10次	H29.07.28	H29.07.28	信楽町	竹原	倉庫・物産	無		24	△	陶器	×	×
11	試掘	17-11次	H29.08.02	H29.08.02	北口町	北口	店舗等	無		32	×	×	×	×
12	試掘	17-12次	H29.09.19	H29.09.21	北口町	谷町	農舎住宅	あり	谷町遺跡	106	○	陶器・磁器	○	籠
13	試掘	17-12次	H29.09.08	H29.09.08	北口町	橋	個人事務所住宅	あり	橋遺跡	6	×	×	×	×
14	試掘	17-14次	H29.09.20	H29.09.20	新緑	介護施設	無		45	×	×	×	×	
15	試掘	17-15次	H29.10.11	H29.10.11	甲賀町	谷原	農家住宅	あり	文殊院遺跡	63	△	陶器	×	×
16	試掘	17-16次	H29.10.25	H29.10.25	北口町	山	宅地造成	無		55	×	×	×	×
17	試掘	17-17次	H30.03.02	H30.03.02	信楽町	牧	開発中	無		30	×	×	×	×
18	分布調査	17-18次	H29.12.05	H29.12.05	信楽町	小川出	太陽光発電	あり	小川出遺跡	5,162	×	×	×	×
19	試掘	17-20次	H30.01.09	H30.01.09	北口町	渡瀬ヶ平	太陽光発電	無		45	×	×	×	×
20	試掘	17-21次	H30.01.25	H30.01.25	甲賀町	谷原	開発中	あり	谷原城遺跡	10	×	×	×	×
21	試掘	17-18次	H30.01.16	H30.01.16	甲賀町	谷原	宅地造成	無		30	×	×	×	×
22	試掘	17-22次	H30.02.02	H30.02.02	甲賀町	山崎野	個人事務所住宅	あり	山崎野遺跡	6	×	×	×	×
23	試掘	17-23次	H30.02.16	H30.02.16	甲賀町	亀池跡	宅地造成	無		24	△	遺構等、焼瓦	×	×
24	分布調査	17-24次	H30.03.13	H30.03.13	甲賀町	谷原	太陽光発電	無		130,799	×	×	×	×
25	分布調査	17-25次	H30.03.28	H30.03.28	甲賀町	神	太陽光発電	無		1,675,600	×	×	×	×
26	確認調査	H27	H29.10.26	H30.03.30	信楽町	長瀬	太陽光発電	あり	東山遺跡	679	×	×	○	大塚遺跡柱礎物

17-01・02次 水口城遺跡

調査位置と調査経緯

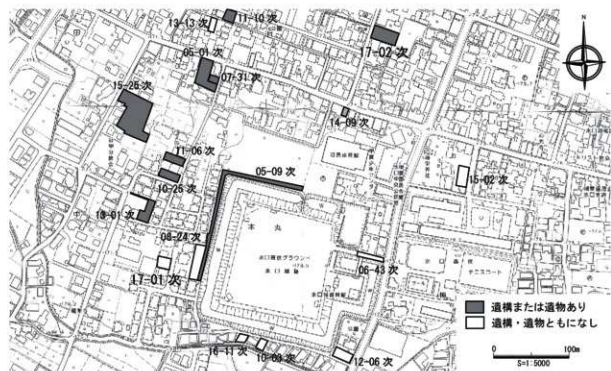
江戸時代初期、近江の主要な街道筋には将軍家が休憩・宿泊するための御殿や御茶屋が築かれた。水口城は、その内の一つであり、寛永11(1634)年に徳川家光が上洛する際に築かれた。水口城の作事奉行は小堀政一(遠州)が務め、幕府京都大工頭中井正純のもと、1年余りで完成した。しかし、宿館として利用されたのは一度だけで、その後は番城となり、城代がほぼ1年交代で城を管理した。

天和2(1682)年に加藤明友が入封して水口藩が成立し、同年6月に水口城は加藤氏に引き渡されている。明友は二の丸部分に藩庁を置き、本丸は將軍の宿館であることから使用していなかった。その後、加藤氏の壬生(栃木県壬生町)転封、鳥居氏の入封、加藤氏の再入封があり、破損部分の修築も行われたが、正徳3(1713)年に本丸は塀・櫓・門・橋・石垣を除き御殿は撤去され、外観のみが残されて明治時代に至った。明治4(1871)年には廃藩置県によって水口城は廃城・国有となった。本丸跡は現水口高校の敷地となり、昭和47(1972)年に滋賀県の史跡に指定された。

水口城は、野洲川の河岸段丘上に立地しており、城の南側は段丘崖である。城の構造は約120m四方の方形区画で、本丸東側に桁形の張り出し部を持つ。城の四方は高さ3m前後、幅8m前後の土塁で囲まれている。本丸内部には、御殿が存在していたが、現在は県立水口高校のグラウンドとなっている。

加藤氏が入封後、本丸の東～西～北にわたって家臣団屋敷を造成し、城地の拡張をおこなった。そのため、東海道を北側へ迂回させている。この家臣団屋敷を含めた城地全体を「郭内」と呼んだ。江戸時代後期に描かれた「水口城郭内絵図」には、水口城とその郭内の様子が描かれており、この「郭内」の範囲が水口城遺跡の範囲となっている。

水口城遺跡では、これまで試掘調査を18件実施している(第1図)。調査の結果、本丸北西側()



第1図：水口城遺跡内における試掘調査位置図

を中心に、近世の遺構や遺物が確認されている。また、堀外周を巡る周遊道路工事に伴う試掘調査(05-09次)では、下層から平安時代中期の遺物が出土している。15-25次では堅穴建物跡を検出し、水口城遺跡内で初めて古代の遺構が確認されている。しかし、水口城遺跡の範囲内は宅地化が進んでおり、確認されている遺構の多くが、後世のかく乱によって破壊され、明確な遺構はほとんど確認されていない。

17-01次は本丸西側で実施した個人住宅建設に伴う試掘調査で、調査面積は4㎡である。17-02次は郭内北端で実施した宅地造成に伴う試掘調査で、調査面積は33㎡である。

調査概要

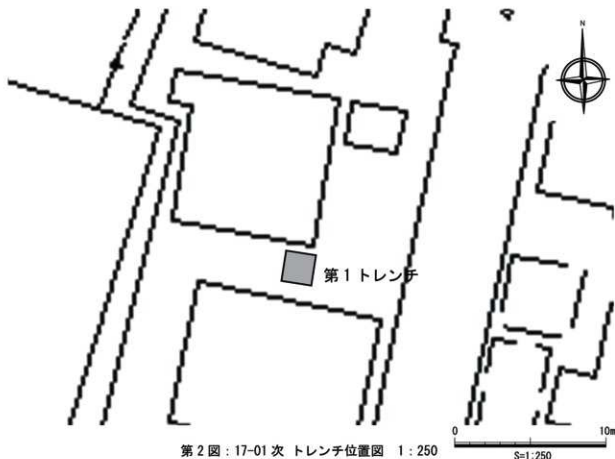
17-01次

調査は2×2mのトレンチを1箇所設定した(第2図)。基本層序は上から①茶褐色砂質土、②濃茶褐色砂質土、③青灰色粘質土、④黒褐色粘質土、⑤茶褐色砂質土(地山)で、現地表面から約170cm下で⑤層を確認した(第3図)。③、④層には現代のプラスチック片や木片などが多く含まれる。⑤層は野洲川の堆積層であるとみられる。

この調査では、遺構・遺物ともに確認できなかった。

17-02次

調査は3×5mのトレンチを1箇所、2×3mのトレンチを3箇所設定した(第4図)。基本層序は、第1トレンチは①表土(既存建物解体時の整地土)、②黄灰色粘土(ベース面)であり、現地表



面から約30cm下で②層を確認した。第2・3・4トレンチは①表土（既存建物解体時の整地土）、②礫混じり暗褐色土（木の根などによる攪乱層）、③礫混じり灰褐色粘質土（遺物含まず）、④灰褐色砂礫（地山）であり、現地表面から約40cm下で③層（第3トレンチは約70cm下）、約70～80cm下で④層を確認した（第5図）。

遺構は近代以降の攪乱坑などが多く、近世以前にさかのぼる遺構は確認できなかった。遺物は2次堆積層や攪乱層から⑤陶器、磁器が出土した。

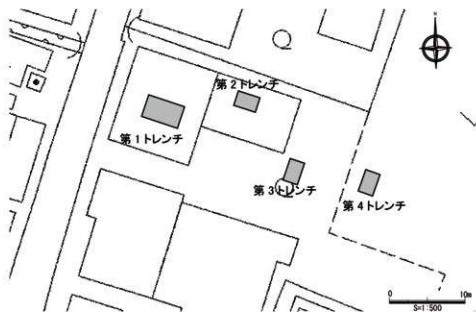


第3図：17-01次 土層断面図（1：40）

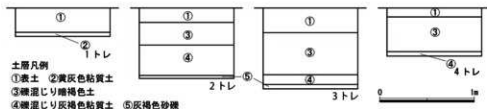
まとめ

17-01次、02次ともに新たに埋蔵文化財を確認することはできなかった。17-01次の地点は、「水口城郭内絵図」では建物などは描かれておらず、沼地であったと推定される。④層は湿地性堆積しており、近現代に宅地化される際に埋め立てられたと考えられる。また遺構や遺物が確認されている地点は北側の東海道に近く、地形が一段高くなった場所であるため、17-01次の調査地周辺は、屋敷地などは存在しなかったと考えられる。

17-02次の地点は、天和3(1693)年以降の東海道沿いに面した場所であり、隣接地には近世までさかのぼると考えられる民家が存在するなど、近世東海道の面影が少なからず残っている。試掘調査で



第4図：17-02次トレンチ位置図 1：500



第5図：17-02次 土層断面図（1：40）

は遺構は確認されず、遺物は2次堆積層や攪乱層からの出土であり、遺構に伴うものは出土していない。したがって、近代以降の攪乱によって遺構は削平されてしまったと考えられる。

水口城遺跡内では宅地化が進んでおり、小規模な発掘調査がほとんどである。しかし、調査成果の蓄積によって水口城の郭内の様相が明らかになるだろう。今後の調査の進展に期待したい。



写真1 17-01次 1トレンチ全景



写真2 17-01次 2トレンチ土層



写真3 17-02次 2トレンチ全景



写真4 17-02次 2トレンチ土層

17-04 次 西林口遺跡

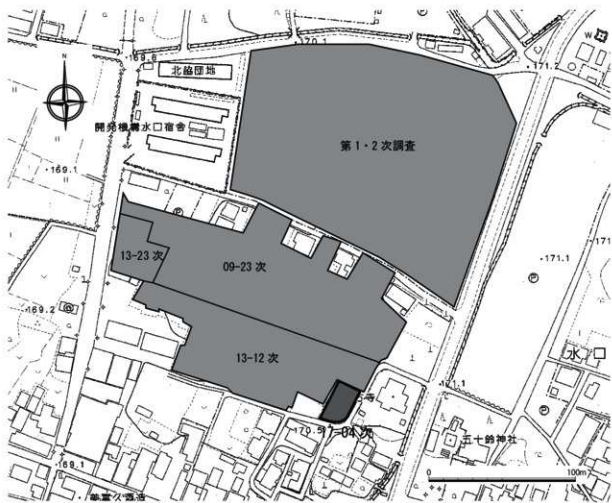
調査位置と調査経緯

西林口遺跡は、水口町西林口に所在する古代から中世の集落遺跡である。野洲川右岸の河岸段丘上に位置し、同じ河岸段丘上には植遺跡や下川原遺跡、北泉遺跡、北脇遺跡といった古墳時代から平安時代にかけての遺跡が確認されている。平成18年度に実施した工場建設に伴う試掘調査（西林口遺跡第1次調査）によって新たに発見された。

これまで西林口遺跡では、5度の本発掘・試掘調査を実施している（第6図）。西林口遺跡第2次調査では、土坑や溝、ピットは検出されたものの、明確な遺構は確認されなかった。遺物は近世のものと考えられる陶器が出土している。

平成21年度（09-23次）と平成25年度（13-12次・23次）に遺跡南側の畑地で試掘調査を実施した。09-23次では調査対象地の一部で遺構と遺物が確認された。しかし、近代を除いて明確に時期を特定できる遺物を伴う遺構は確認されなかった。13-12次では、大半の遺構からは遺物が出土せず、近現代のかく乱を受けていた。しかし、一部の遺構からは10世紀後半の緑釉陶器碗や12世紀中頃の土師器皿、14世紀代の信楽焼が出土した。13-23次では遺物・遺構ともに確認されていない。

このように、西林口遺跡では近現代のかく乱が多く、遺跡の詳細は不明である。しかし、緑釉陶



第6図：調査対象範囲位置図 1：2,500

器や中世の土師器、信楽焼が出土することから、平安時代から中世にかけての集落であったと推定される。

17-04 次は遺跡の南東部で実施した宅地造成に伴う試掘調査で、調査面積は 18 m²であった。

調査概要

調査は 3 × 3 m のトレンチを 2 箇所設定した（第 7 図）。基本層序は、①畑耕作土、②灰褐色土、③黄灰色粘質土、④黄灰色砂礫（地山）であり、現地表面から約 30 cm 下で③層、約 40 ～ 70 cm 下で④層を確認した（第 8 図）。

遺構は、第 1 トレンチでピット 1 基を確認した。直径約 15 cm、深さ約 30 cm で出土遺物なく、性格は不明である。第 1・2 トレンチともに近代以降のかく乱が多い。

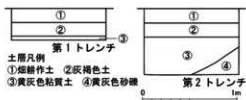
遺物は、近世以降のものがほとんどである（第 9 図）。

1 は肥前系磁器の椀である。高台部のみ残存し、高台径は 3.9 cm である。底部が厚く作られ、全面に釉薬がかかり、見込み部には蛇の目軸剥ぎ痕が確認できる。2 は播鉢である。底部と体部の一部のみが残存し、底部径 14.5 cm である。内面には隙間無く挿り目が施され、全面に鉄釉がかかっている。



まとめ

これまでの調査で近代以降のかく乱が確認されており、今回の調査でも同様に、近代以降のかく乱



第8図：土層断面図 1：40



第9図：17-04次 出土物実測図

が確認されていることから、近世以前の遺構は削平されてしまったと考えられる。

水口盆地に立地する遺跡は、時代別に並べると植遺跡→下川原遺跡→北泉遺跡→北脇遺跡→西林口遺跡となり、時代が下るにつれて、野洲川の下流から上流へと人々の生活拠点が移動したことがうかがえる。西林口遺跡はその中でも新しい遺跡であり、水口地域における古代から中世への変遷を理解する上で重要な遺跡である。今後、周辺の調査事例の増加によって、西林口遺跡の詳細が明らかとなるだろう。調査の進展に期待したい。



写真5 トレンチ全景



写真6 トレンチ土層



写真7 1トレンチピット検出



写真8 1トレンチピット完掘

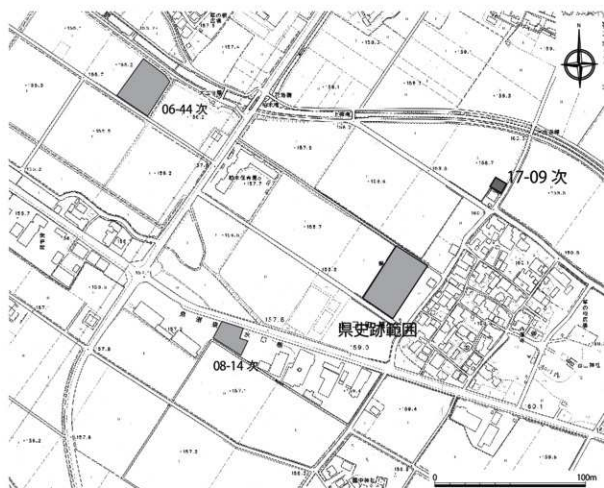
17-09次 植遺跡

調査位置と調査経緯

植遺跡は、水口町植に所在する古代から中世にかけての集落遺跡で、野洲川右岸の河岸段丘上に位置する。平成13～14年度にかけて大規模な発掘調査を実施している。この調査では、竪穴建物119棟、掘立柱建物17棟のほか、3棟の大型倉庫建物が確認された。同様の大型倉庫は、全国的に見ても類例が少なく、見つかっている遺跡は交通の要衝やヤマト政権に直属する場所、その傘下の有力豪族の本拠地付近にある。この植遺跡の大型倉庫建物もヤマト政権が物資や物流などを管理する目的で建てたと考えられる。遺跡は現地保存され、平成21年に滋賀県の史跡に指定された。

遺跡内では試掘調査が数件実施されている。遺跡の西端で実施された06-44次調査では、遺構は確認されなかったものの、須恵器や土師器などの遺物が一定量出土している。遺跡の南端で実施された08-14次調査でも、遺物は出土している。どちらも小規模な試掘調査であり、遺構は検出されていないが遺物が出土しており、今後植遺跡内において新たな遺構が見つかる可能性は大いにある。

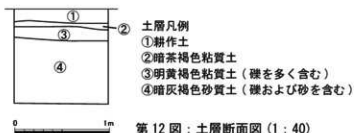
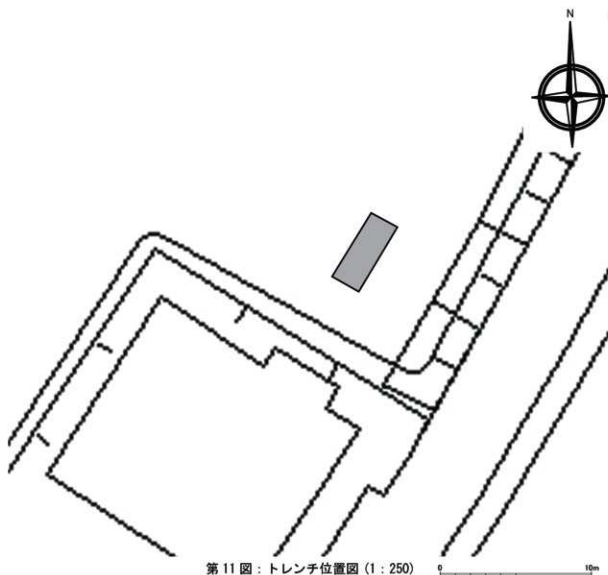
17-09次は遺跡の北東部で実施した個人専用住宅建設に伴う試掘調査で、調査面積は10㎡である(第10図)。



第10図：調査対象地位置図 1：2,500

調査概要

調査は2×5mのトレンチを1箇所設定した(第11図)。基本層序は、①耕作土、②暗茶褐色粘質土(礫含む)、③明黄褐色粘質土(礫を多く含む)、④暗灰褐色砂質土(礫および砂を多く含む)であり、現地表面から約20cm下で③層、約35cm下で④層を確認した(第12図)。①層より下層では礫や砂を含んでおり、遺構・遺物ともに確認できなかった。



まとめ

今回の調査地では遺構や遺物は無く、植遺跡に関わる埋蔵文化財は確認できなかった。下層には礫や砂が含まれており、河川の堆積によるものであると考えられる。

植遺跡の中心部は東に延びる舌状に張り出す低位段丘上に立地している。今回の調査地はその段丘よりも北の小さな谷筋に位置することから、遺構は確認されず河川堆積が確認されたとみられる。



写真9 トレンチ全景



写真10 トレンチ土層



写真11 トレンチ掘り下げ

17-12次 水口岡山城遺跡

調査位置と調査経緯

水口岡山城遺跡は、水口町水口に所在する中世から近世にかけての城跡である。甲賀郡最大の独立丘陵である古城山に、天正13(1585)年、豊臣秀吉の家臣である中村一氏によって水口岡山城は築かれ、その山麓に城下町が整備された。

これまでの地形測量調査や4次にわたる発掘調査によって、城内の曲輪の配置や破城に伴う石垣崩落状況、本丸両端に造られた櫓台の構造などが明らかとなった。平成29年2月9日に、城郭遺構が良好に残る古城山一帯が、「水口岡山城跡」として国史跡に指定された。

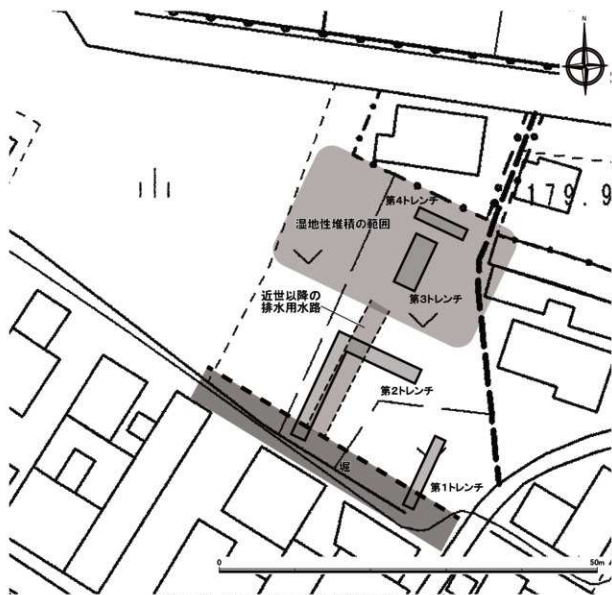
今回の調査は、史跡指定範囲外の山麓部分で実施した。山麓部分は絵図によると、城郭と城下町を区画する堀が山麓をめぐる、堀の内側には家臣団屋敷が造られたと推定されている。そして、城内への出入口となる枡形が3ヶ所存在したことが絵図からうかがえ、中央を「大手」、西側を「西追手」、東側を「東追手」と呼んでおり、それぞれ大岡寺の門前付近、水口小学校の正門付近、湯屋町の西側付近に想定されている。

17-12次は東追手推定地付近で実施した集合住宅建設に伴う試掘調査で、調査面積は105㎡であった(第13図)。



第13図：試掘調査対象地位置図 1:5,000

0 200m



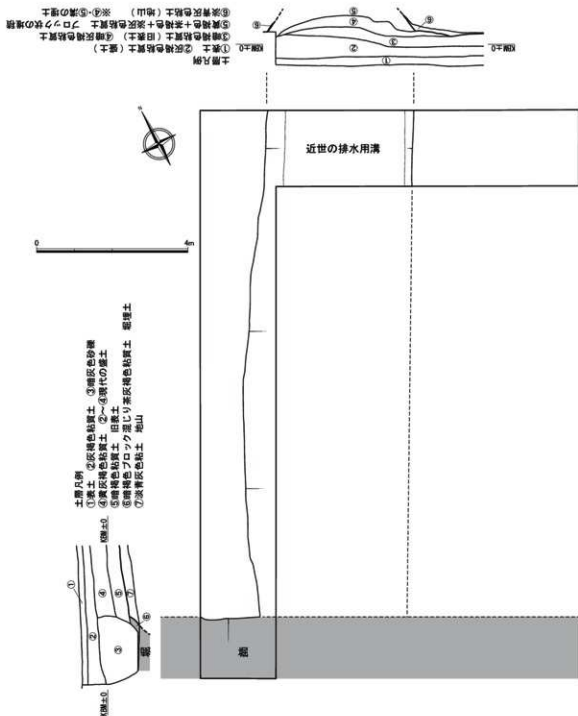
第14図：トレンチ位置と検出遺構の状況 1：500

調査概要

基本層序は、①表土、②黄灰褐色ないし灰褐色粘質土、③暗灰色砂礫（第2トレンチのみ）、④暗褐色粘質土（旧表土）、⑤炭混じり灰色粘質土、⑥小礫混じり灰褐色粘質土、⑦砂礫+灰色粘質土、⑧灰色粘質土、⑨礫混じり茶灰色粘質土、⑩茶色ブロック混じり灰色粘質土、⑪淡茶灰色粘質土、⑫灰色砂質粘土、⑬有機物混じり黒色粘質土（湿地性堆積）、⑭暗灰色粘質土、⑮灰褐色+茶褐色+黄灰色粘質土、⑯黄灰色ブロック混じり暗灰色粘質土、⑰淡灰色粘質土、⑱黒灰色粘質土、⑲淡灰色ないし淡茶灰色粘質土（地山）である（第15図）。②・③層は現代の盛土、⑤～⑫層は第1トレンチのみで確認されている近代の盛土である。遺構面の深さは、現況地表面から0.3～1.3mで、地山は北から南へ下がりながら傾斜している。

遺構は第1・2トレンチで東西方向の堀を検出した（第14図）。堀は北側の肩のみ検出し、南側の肩は調査区外にあるとみられる。現況でわかる堀の幅は1.2m～1.5mである。堀底まで掘削をしていないため、深さは不明である。堀埋土からは近世以降の遺物が出土している。

第2トレンチでは、南北方向の溝を検出した。幅は3.8mで、埋土から近世以降の遺物が出土し



第16図：第2トレンチ平面図・土層図 1：100

ている（第16図）。

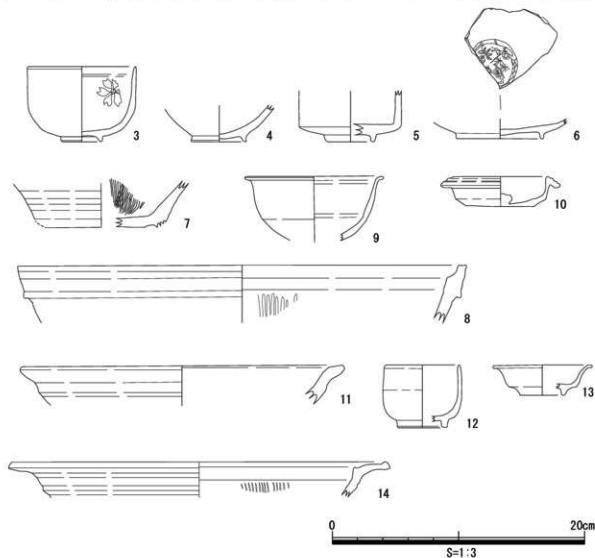
遺物は第1トレンチで多く出土している（第17図）。3～8は第1トレンチ精査時に出土した。3は陶器の椀で、口径8.8cm、器高6.0cm、高台径3.1cmである。削り出し高台で、体部は丸みを帯び口縁にかけて直立する。外面には桜の文様が描かれている。内面から外面体部にかけて透明釉がかかる。4・5は染付の椀である。高台部から体部にかけて残存し、高台径は推定4.4cmである。体部はゆるやかに湾曲して立ち上がる。5は高台部から体部にかけて残存し、高台径は3.6cmである。体部は強く屈曲し、直線的に延びる。6は磁器の皿である。底部のみの残存し、高台径は6.6cmである。見込み部には松と竹の文

様が円状に描かれる。7・8は信楽焼の播鉢である。7は口縁が残存する。8は底部が残存し、高台部は剥がれた痕跡が確認できる。どちらも播目が確認でき、内面全体に播目が施されていたと推定される。

9～11は第1トレンチ上層の断ち割り時に出土した。9は陶器の端反碗で、口径11.0cm、器高(残存高)5.1cm、口縁から体部にかけて残存している。体部は丸みを帯び、口縁端部は大きく外反する。内外面に釉薬がかかる。10は信楽焼の土瓶の蓋である。口径9.6cm、器高2.4cmである。見込み部につまみが付いている。内面は鉄軸がかかるが、外面はかからず、ケズリにより調整している。汽車土瓶の蓋であるとみられる。11は信楽焼の捏鉢で、口縁のみの残存である。口径推定26cmである。色調は黄灰褐色で、口縁端部は外方へややつまみ出す。

12～14は第1トレンチで検出した堀の埋土上層から出土した。12は磁器の碗で、口径5.8cm、器高5.0cm、高台径3.8cmである。体部は直線的に延びる。内外面に釉薬がかかるが、高台の接地面のみ釉薬がかからない。13は磁器の皿である。口径は推定8cm、器高は2.4cmである。口縁端が強く外反する。14は信楽焼の播鉢である。口縁部が残存し、内面全体に播目が施されている。

これらの遺物は一部中世とみられるものも含まれるが、ほとんどが18世紀から19世紀後半にか



第17図：17-12次 出土遺物実測図

けてのものであり、堀埋土の最上層からは19世紀ものと考えられる遺物が出土している。

まとめ

今回の調査で検出した東西方向の堀からは、上層のみの掘削であるが、最上層から近代の遺物も出土している。開削された時期は不明であるが、堀が完全に埋没したのは近代に入ってからであるとみられる。また、この堀は、絵図の堀の位置と一致しており、水口岡山城の山麓に造られた城郭と城下町を区画する堀の一部であると考えられる。

調査地北側に設定した第3、4トレンチでは、湿地性堆積の確認し、第2トレンチでは南北方向の近世以降の溝を検出している。この溝は、調査地周辺の水はけが悪いため、排水用として掘削されたものと考えられる。

水口岡山城の山麓の堀は、現在も幅約1～2mの用水路として姿を残している（写真）。今回見つかった堀の南側には、その用水路が流れており、当時の堀の幅は5m程度あったのではないかと考えられる。近代以降水口宿が整備され、その後宅地化が進むにつれて堀の幅は小さくなり、現在の用水路に変化していったとみられる。

今回の調査は、試掘調査であるが水口岡山城の山麓部分での初めての発掘調査であった。城郭については発掘調査が実施され、その構造が明らかとなりつつあるが、城下町は当時の町割り（三筋町）が残るだけである。発掘調査が進むことで、枡形や堀といった山麓部分の構造や、城下町の様子が明らかとなるだろう。

なお、今回検出した堀跡は、事業者の協力により設計変更を行い、現地保存されている。



写真 12 1トレンチ下層全景（北から）



写真 13 1トレンチ土層（西壁）



写真 14 1 トレンチ堀検出（東から）



写真 15 1 トレンチ堀上層掘削



写真 16 2 トレンチ全景（北から）

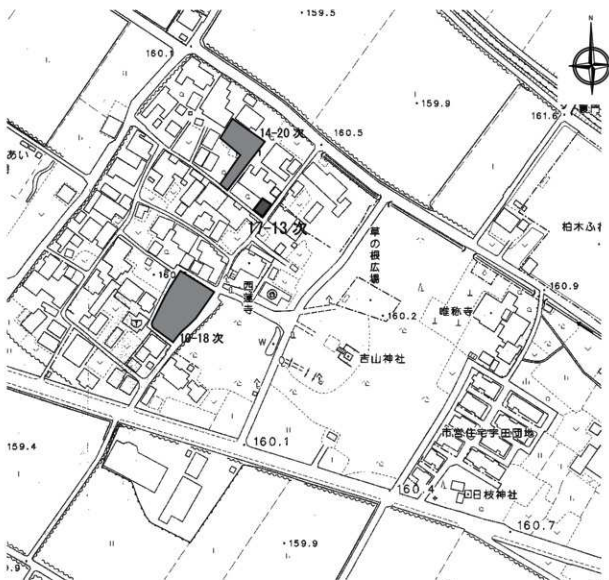
17-13次 植城遺跡

調査位置と調査経緯

植城遺跡は、水口町植に所在する中世の平地城館であり、野洲川右岸の河岸段丘上に位置している。植城跡に成立した植村は、慶長年間（1596～1615）に清水・大宝寺の2村が、近世東海道の整備に伴い、移転してきたと伝えられ、その際に植城の跡地を村に再編成したと考えられている。

甲賀郡内に築かれた城館の多くは、単郭方形の構造をしたものである。しかし、植城は土塁と空堀によって、東西約350m、南北約255mの長方形に区画された城域内部を、さらに細かく区画するという形態である。明治時代の地籍図にも、「城内」や「奥屋敷」など城に関わる小字名が記されている。

これまで、植城遺跡では平成16年度に植集落内のほぼ中央で、滋賀県教育委員会による県道拡幅工事に伴う発掘調査が実施されている。調査の結果、堀跡が確認され、埋土からは15世紀から16世紀中頃の信楽焼の甕や播鉢が出土した。植城の堀は15世紀ころに掘削され、16世紀中頃まで機能していたとみられる。



第18図：調査対象地位置図 1：2,500

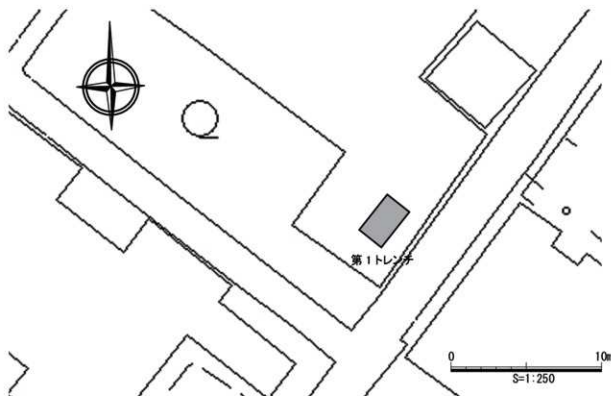
植城遺跡内での試掘調査は、10-18次と14-20次に実施している（第18図）。しかしどちらの調査も、近世以降の遺物は出土するものの、中世にさかのぼるような遺物は出土しておらず、遺構も確認されていない。

17-13次は遺跡の北西部で実施した個人専用一戸建て住宅建設に伴う試掘調査で、調査面積は6㎡であった。

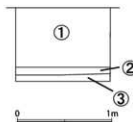
調査概要

調査は2×3mのトレンチを1箇所設定した（第19図）。基本層序は、①造成土（近現代の遺物含む）、②黄灰色粘質土、③茶褐色粘質土（地山）であり、現地表面から約60cm下で②層、約70cm下で③層を確認した（第20図）。②層は固く締まっていたが、約10cm下げると③層となった。

遺構は確認されず、遺物も①層に含まれる近現代のものだけであり、近世以前に遡る遺物は確認されなかった。



第19図：トレンチ位置図 1：250



土層凡例

- ①造成土（礫を多く含む）
- ②黄灰色粘質土（硬く締まっている）
- ③茶褐色粘質土

第20図：土層断面図（1：40）

まとめ

今回の調査では、植城に関わる埋蔵文化財は確認されなかった。城の西側にある現在の集落には土塁

が一部残るだけで、現在土塁や堀が残存しているのは、城の東側にある吉山神社の境内である。これらのことから、慶長年間の植村の成立以降に、宅地化の障害である土塁や堀は姿を消したと考えられる。

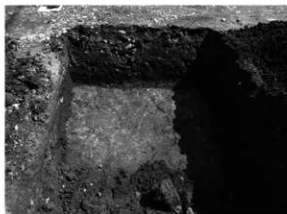


写真17 トレンチ全景



写真18 トレンチ土層

17-15 次 文殊院遺跡

調査位置と調査経緯

文殊院遺跡は、甲南町池田の柚川左岸の河岸段丘上に立地する寺院跡である。檜尾寺文殊院の境内とその東側が遺跡の範囲である。檜尾寺は遺跡の北西にある檜尾神社の別当寺として、二十八院六坊を有する大寺であったという。現在は文殊院が残るのみであるが、周辺には多くの坊院があったと推測され、丘陵裾にはいくつかの平地地が残っている。

文殊院遺跡では文殊院境内の南東側の谷筋にあたる部分で発掘調査が行われており、溝や土坑を検出し、瓦器を中心に多くの中世土器が出土している。しかし、調査範囲が狭小で、遺跡の詳細は明らかになっていない。

17-15 次は遺跡の南東部で実施した霊園墓地造成に伴う試掘調査で、調査面積は 63 m²であった（第 21 図）。

調査概要

調査は 3 × 5 m のトレンチを 3 箇所、2 × 3 m のトレンチを 3 箇所設定した（第 22 図）。調査地は北側と南側で段差があり、第 1 ～ 4 トレンチは下段、第 5・6 トレンチは上段に設定した。

基本層序は、上段は①茶褐色土（表土）、②明茶褐色土（礫、コンクリ片含む）、③暗茶褐色土、④明灰色粘質土であり、現地表面より約 80 cm 下で④層を確認した。下段は①茶褐色土（表土）、②灰色粘質土（橙色土混じり）、③灰色粘質土、④灰褐色粘質土（明黄褐色土混じり）、⑤青灰色粘質土であり、現地表面から約 100 cm 下で⑤層を確認した（第 23 図）。

調査の結果、遺構は確認されず、遺物は下段トレンチの④層から陶器と磁器、瓦の小片がごく少数出土したが、遺構に伴うものではなく二次堆積層からの出土であった。

まとめ

今回の調査では、文殊院遺跡に関わる埋蔵文化財は確認されなかった。これまでの調査では、多くの瓦器が出土している。この瓦器は近江で生産された「近江型瓦器」とは異なり、伊賀型や大和型の影響を受けたと考えられている。文殊院遺跡は、柚川中流域の様相を知る上で重要な遺跡であり、伊賀や大和との関わりをうかがうことができる遺跡である。



第 21 図：調査対象地位置図 1：2500

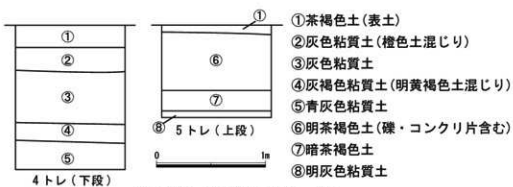
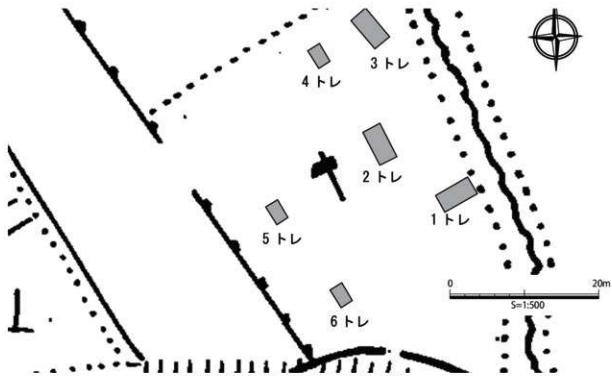


写真19 4トレンチ全景



写真20 5トレンチ全景

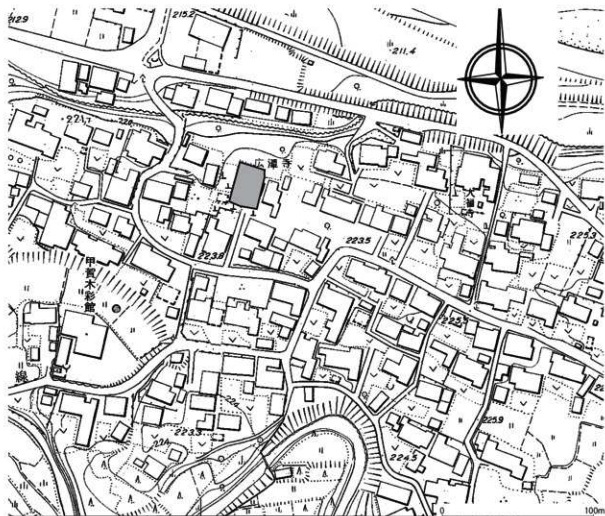
17-21 次 岩室城遺跡

調査位置と調査経緯

岩室城遺跡は、甲賀町岩室に所在する中世の平地城館である。城は野洲川左岸の河岸段丘崖上に築城され、『甲賀郡志』には岩室氏が城主であるとの伝承が記されている。この岩室氏は、足利將軍家と直接の主従関係を結んだ甲賀奉公衆である。奉公衆とは、將軍に近侍した御家人をいう。岩室氏は、応永14(1407)年4月に岩室家俊が將軍足利義満から、同29(1422)年12月には足利義持から「甲賀郡頓宮郷半分」を安堵されている。

城の範囲は、現在城跡に残る広澤寺境内が一边約50mの方形であり、この方形区画が曲輪の範囲であったとみられる。方形区画の北辺と東辺には高さ約1.8mの土塁が残存している。南西端には、土塁の基底部と考えられる微高地が存在する。伝承によると、方形区画の東西辺と南辺の外側に堀があったとされるが、現状では存在しない。

17-21次は北辺に残る土塁の南側で実施した、寺院本堂の建て替え工事に伴う試掘調査で、調査面積は10㎡であった(第24図)。



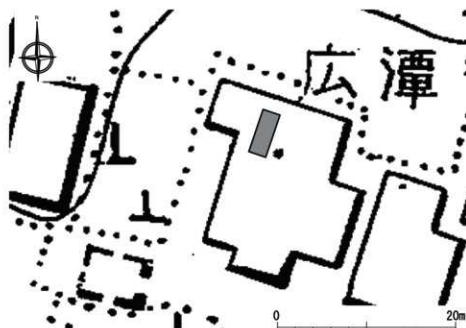
第24図：調査対象範囲位置図 1：2500

調査概要

調査は2×5mのトレンチを1箇所設定した(第25図)。基本層序は上から、①灰褐色土(本堂基壇)、②茶褐色粘質土、③茶褐色粘質土(小礫を含む)、④明灰褐色土礫層、⑤暗茶褐色礫層、⑥茶褐色粘質土(確認面)で、現地表面(基壇上)から約140cm下で⑤層を確認した(第26図)。①～⑤層は礫が含まれ、⑥層上では炭のような堆積も一部確認できたが、遺構や遺物は確認されなかった。

まとめ

今回の調査では、岩室城に関わる埋蔵文化財は確認されなかった。これまで甲賀郡内にある城館の内部を発掘した例は少なく、内部構造の解明が期待されたが、広潭寺の本堂を建てる際に、内部の遺構は削平されてしまったと考えられる。今回の調査は小規模な試掘調査であるため、遺跡の詳細を明らかにすることができなかった。今後の調査に期待したい。



第26図：土層断面図(1:40)



写真 21 本堂基壇除去後



写真 22 トレンチ全景



写真 23 トレンチ土層

17-22次 補陀楽寺遺跡

調査位置と調査経緯

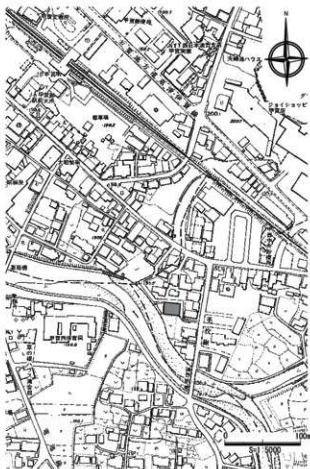
補陀楽寺遺跡は、甲賀町大原市場に所在する中世の寺院跡である。遺跡のすぐ北側には杣街道が通り、南側には杣川が流れる。補陀楽寺は火災によって消失し、調査地より北西へ約700mの地点の、補陀楽寺城の曲輪内へ移転したといわれている。現在の補陀楽寺は、甲賀西国観音霊場第九番札所であり、本堂は寛延2(1749)年に建造された。本堂の周囲には室町時代の土塁が残り、補陀楽寺城跡として周知の埋蔵文化財包蔵地に登録されている。

補陀楽寺遺跡ではこれまで本発掘調査はおろか、試掘調査も実施されておらず、遺跡の詳細は不明である。

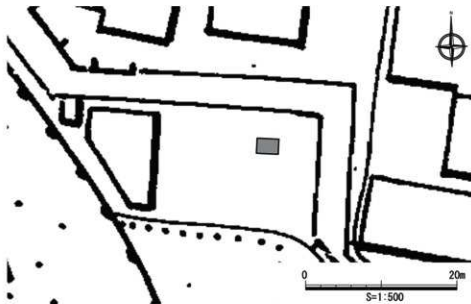
17-22次は遺跡の南側で実施した個人専用一戸建て住宅建設に伴う試掘調査で、調査面積は6㎡である(第27図)。

調査概要

調査は2×3mのトレンチを1箇所設定した(第28図)。基本層序は、①暗灰褐色土(表土)、②黄灰色砂質土、③暗茶褐色粘質土(碎石含む)、④青灰色粘質土(地山)である(第29図)。現地表面から約100cm下で④層を確認した。①層から③層までは現代の造成土である。



第27図：調査対象範囲位置図(1:5000)

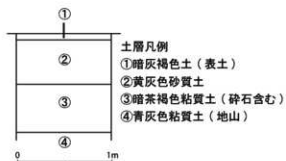


第28図：トレンチ位置図

造成土のすぐ直下が地山であり、遺構面は確認できなかった。また遺物も出土していない。

まとめ

今回の調査では、補陀楽寺遺跡に関わる埋蔵文化財は確認されなかった。今回の試掘調査が、補陀楽寺遺跡での初めての調査であるため、今後の調査成果の蓄積によって、補陀楽寺の詳細は明らかになるだろう。



第 29 図：土層断面図 (1 : 40)



写真 24 トレンチ全景



写真 25 トレンチ土層

報告書抄録

ふりがな	へいせいさんじゅうねんど しないいせきはつくつょうさほうこくしよ							
書名	平成30年度 市内遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	甲賀市文化財報告書							
シリーズ番号	第33巻							
編著者名	伊藤 航貴							
編集機関	甲賀市教育委員会							
所在地	滋賀県甲賀市水口町水口6053番地							
発行年月日	平成31年(2019年)3月29日							
所収遺跡	所在地	コード		世界測地系		調査面積(m ²)	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東経			
水口城遺跡	水口町本丸	25209	363-113	34° 58' 13.5"	136° 09' 46.1"	4	2017/4/17	個人住宅
水口城遺跡	水口町水口	25209	363-113	34° 58' 23.4"	136° 09' 57.6"	33	2017/6/12	宅地造成
西林口遺跡	水口町西林口	25209	363-101	34° 58' 28.5"	136° 09' 40.4"	18	2017/6/20	宅地造成
植遺跡	水口町植	25209	363-090	34° 58' 35.6"	136° 08' 42.6"	10	2017/9/28	個人住宅
水口岡山城遺跡	水口町京町	25209	363-087	34° 58' 02.6"	136° 10' 49.6"	105	2017/9/19～ 2017/9/21	集合住宅
植城遺跡	水口町植	25209	363-025	34° 58' 31.2"	136° 08' 44.2"	6	2017/9/8	個人住宅
文殊院遺跡	甲南町池田	25209	366-009	34° 53' 58.5"	136° 12' 09.8"	63	2017/10/11	霊園墓地
岩室城遺跡	甲賀町岩室	25209	365-118	34° 56' 00"	136° 15' 07.5"	10	2018/1/25	寺院建替え
補陀楽寺遺跡	甲賀町田畑野	25209	365-042	34° 53' 54.3"	136° 12' 51"	6	2018/2/2	個人住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
水口城遺跡	城館跡	近世				陶磁器		
西林口遺跡	集落跡	平安		ピット		陶磁器		
植遺跡	集落跡	古墳～中世						
水口岡山城遺跡	城館跡	室町		堀跡		陶磁器		
植城遺跡	城館跡	古墳・室町						
文殊院遺跡	社寺跡	その他				陶器		
岩室城遺跡	城館跡	室町						
補陀楽寺遺跡	社寺跡	その他						

甲賀市文化財報告書第33集
平成30年度 市内遺跡発掘調査報告書

印刷・発行 2019年3月29日
編集・発行 甲賀市教育委員会
滋賀県甲賀市水口町水口6053番地
TEL 0748-69-2251
FAX 0748-69-2293
印 刷